

親の病気を他者に告白すること、しないことに関する経験

－ 若年認知症者の親をもつ子どもに着目して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
鈴木 航平

本研究では病気の親をもつ子どもが親の病気についてカミングアウトした経験、しなかった経験に焦点を当てる。その際、どのようなことを感じ、どのような行動をしているのかを明らかにすることを通して、ヤングケアラーについて理解を深めることを目的とする。調査対象者は若年認知症の親をもつ3名を対象とした。3名とも、ヤングケアラーに該当する18歳未満の時に親が若年認知症の診断を受けた者である。3名に対し半構造化インタビューを行い、各々のライフストーリーを作成した。カミングアウトに関連する語りに焦点を当ててライフストーリーを考察した結果、病気の親について自発的に話すことはほとんどみられなかった。親の病気について話すのは自然な会話の流れや状況になったときが多くみられた。また、カミングアウトをしない、ためらわせる要因として「周囲に気づかれないように生活するため」「理解してもらうことを諦めたため」「説明する労力が大きいため」「特別扱いをされたくないため」「家の中と外をはっきり分けて生活したい」「不幸自慢になることを危惧したため」の6つが示唆された。その一方で、理解してくれる人がいるなら話してみたいと考えていることが示唆された。本研究から、親の病気を他者に告白することの困難性はそれぞれの人の病気の受けとめ方、病気の親を抱えつつ生活するための対処法と密接に関連していることが示唆された。